

# 琉球大学学術リポジトリ

## 自発表現の文

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2014-09-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村上, 三寿, Murakami, Mitsuhisa メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/29639">http://hdl.handle.net/20.500.12000/29639</a>

# 自発表現の文

## The Japanese sentence type "Jihatsu"

variation in passive constructions for expression of spontaneous thought and emotions

村上三寿

Murakami Mitsuhsia

### 【はじめに】

現代日本語のなかには、いわゆる「自発表現の文」とよばれる文があり、それらの文がどのような文法的な意味を実現しているかについて、われわれは経験的な事実としてはよくとらえ、日常の言語活動においても、ほぼまちがいなく使いこなしていると言っていいだろう。[ためらわれる・はばかられる・くやまれる・ほほえまれる・しのばれる・おもいだされる] のように、動詞に接尾辞〈-a r e r u〉をつけてつくられる文法的なかたちを述語にする文である。《s a r e r u》で代表されるこの文法的なかたちが、「うけみ（受動態）」とおなじ文法的なかたちであるということも、日常の経験的な使用のなかでは知っている。また、この文法的なかたちを述語にする文が、「可能表現の文」としても使われたり、ときには、いわゆる「敬語表現の文」のために使われたりするということも、経験的な事実としてはとらえられていると言っていいだろう。そういう意味では、この《s a r e r u》で代表される文法的な形式のもつ文法的な意味は多義的である。

- ・いもうとが おとうとに たたかれる。 (うけみ)
- ・彼が あす 来るとは 考えられない。 (可能)
- ・それを 口に 出すのは ためらわれる。 (自発)

このおなじ文法的なかたちが別々の文法的な意味をさしだしていく、日常の

言語活動において、それらを区別してうけとめたり、つかいわけているという事実は、経験的にではあっても、その文法的な意味を実現させている条件をわれわれがとらえているということをしめしている。では、その文法的な意味を実現させている条件とは何かということを理論的にさしだすことは文法論の仕事であるが、それは、それほど簡単なことではない。

一般に、文法論の研究においては、単語の文法的なかたちが文のなかでどういう文法的な意味を実現しているかを記述していくわけだが、そのプロセスのなかで、経験的な事実としてとらえられている現象のなかに、そこをつらぬいている法則、あるいは根底にひそんでいる本質をみつけだし、それを体系としてとらえてさしだすことが学問としての文法論の大きな仕事である。その際、個々の文法的なかたちのもつ文法的な意味をとらえることそれ自体が、文法的なカテゴリーのなかにすえておこなわれる作業であって、これは文法論の方法論的な基本であり、原則である。

たとえば、《s a r e r u》という文法的なかたちのなかに、「うけみ」という文法的な意味をもとめるとすれば、それば《ヴォイス（態・v o i c e）》のカテゴリーのなかにすえたうえで、《s u r u》という文法的なかたちとの対立のなかでとらえる必要がある。このなかで、一方が「他者からの動作のうけとり（受動）」であるとすれば、他方は「他者への動作のはたらきかけ（能動）」をあらわし、たがいに他の存在を前提としたうえで《ヴォイス》のカテゴリーをつくる。このようにとらえれば、「他者へのはたらきかけをあらわさない動詞（自動詞）」は、その語彙的な意味の性格からいって、《ヴォイス》のカテゴリーのなかには入りこまないことになる。つまり、このカテゴリーを形成し、能動と受動という文法的な意味の対立をなすことができるのは、「他動性」というカテゴリカルな意味をもつ動詞にかぎられるということになる。ある文法的なかたちをとることができるかどうか、すなわち、ある文法的なカテゴリーのなかに入りこむことができるかによって、動詞のもつカテゴリカルミーニング（自動性・他動性）を特定することができるともいえる。まれに、自動詞も《s a r e r u》というかたちをとつて「めいわく性（迷惑のう

けみ・第3者のうけみ)」の意味をおびることもあるが、それはかぎられた条件のなかでのみおこる派生的な現象であって、本来の《ヴォイス》のカテゴリーのなかに参加しているわけではない。ひとつひとつの動詞はそれぞれが語彙的な意味をもって日本語の語彙体系のなかに存在しているのだが、それらは決してばらばらに存在しているわけではなく、その語彙的な意味の構造のなかにあるいくつかの共通する側面、カテゴリカルミーニングによっていくつかのグループをつくりあげている。それらのカテゴリカルミーニングは、他の単語とのくみあわせの能力として連語論的な現象のなかに発現してくることもあるだろうし、動詞の文法的なかたちのもつ文法的な意味の実現のし方のなかに発現してくることもあるだろう。動詞の語彙的な意味の構造のなかにひそむ本質としてのカテゴリカルミーニングは、かならず何らかの文法現象としてあらわれているはずである。ひとつの動詞の内部には、その構造的な側面としていくつかのカテゴリカルミーニングがそなわっていて、それらを正確にとりだすには、それぞれの文法的なカテゴリーのなかにすえてとらえるしかない。そういう意味でも、文法論においては、ある文法的なかたちがどのような文法的な意味を実現しているのかを確認する作業とそれがいかなる文法的なカテゴリーに位置づけられるのか、その体系を確認する作業とはきりはなすことができない。

このことについて、奥田靖雄は『アスペクトの研究をめぐって』(1977) のなかで、文法的なかたちのもつ文法的な意味を理論的に確定するために、文法的なカテゴリーのなかでの対立物の統一としてとらえ、検討することの重要性をくりかえし述べている。この論文では、《site-iru》の文法的なかたちを、《suru》という文法的なかたちに対立させながら、《アスペクト》のカテゴリーのなかに位置づけることによって、たがいの文法的な意味を体系としてさしだしている。そしてさらに、アスペクトのカテゴリーのなかの一方のかたち《site-iru》が、「動作の継続」と「変化の結果の状態」のいずれを実現するかにしたがって、動詞のカテゴリカルミーニング(動作性・変化性)の正確なとりだしをおこない、それにしたがった動詞の分類に成功している。奥田自身は、自分はアスペクト研究の専門家ではなく、方法論上の道

すじをさししめただけだと述べてはいるが、これがその後の日本語のアスペクト研究に大きく道をひらいたことはまちがいない。そして、この奥田がこの論文でさしだした文法研究の方法論は、アスペクト研究ばかりでなく、わたし自身の《ヴォイス》の研究や《やりもらい》の研究にとっても、さらに、その後の文法研究の方法の理論的な、基礎的なささえとなってきた。

今回のこの報告では、「自発」とよばれているものについて、それがどのような文法的なカテゴリーに位置づけられ、どのような文法的な意味を実現しているのか、動詞のカテゴリカルミーニングとの関係のなかでさぐっていくことになる。

ところで、もう一方において考慮しなければならないことは、動詞が文のなかに存在し、そのなかでその文法的なかたちが文法的な意味をになわされないとすれば、そのかたちの実現している文法的な意味というのは、その構文論的な機能のもとでつくりあげられているという事実である。ときには、その構文論的な機能によって、その文法的な意味に修正をうけることもある。たとえば、《s a r e r u》という文法的なかたちが、形態論的には「うけみ（動作のうけとり・客体）」という文法的な意味をもっているということは確かであるが、「うけみ構造の文」として構文論的にとらえていくならば、その述語動詞の表現しているものは、かならずしもそうとばかりも言えなくなる。

- ・いもうとが おとうとに たたかれた。 (動作のうけみ)
- ・たいこが 若者たちに たたかれている。 (動作のうけみの継続)
- ・体育館の ガラスが 割られている。 (客体の変化の結果の状態)
- ・秋の 山々が 紅葉で いろどられている。 (主体の状態)
- ・入江は 切りたった 崖に 囲まれている。 (配置の関係)

上の3つめの"割られている"は、"割る"という客体に変化をもたらす「もよがえ動詞」のうけみのかたちであるために、"割れている"という自動詞とく

らべれば、確かに動作の客体性がその文法的なかたちのなかにのこされているとも言える。しかし、「うけみ構造の文」のひとつのタイプとしてとらえるならば、動作主体が明示されていないこの種の文は、主体の状態をあらわす文にはほぼ移行しているだろう。文の主語が"テーマ"をさしだし、述語が"それについて述べる"というのは、文のもつ普遍的な機能的な構造であるが、もう一方からみれば、主語は"動作のし手・状態や属性のもち主"をさしだし、述語は"その主体の動作や状態や属性"をさしだすという意味的な構造をもっていて、文の機能的な構造と意味的な構造はおおくの場合たがいに照応している。「うけみ構造の文」というのは、その動作の"主体"という面でいえば、その照応がいつたんこわされているのだが、文の主語の位置をしめるということによって、状態の"主体"として、主語性をとりもどしていく。意味構造に対する機能構造の優位性である。そして、その主語のもつ意味に照応して、述語動詞のもつ文法的な意味にも変更がもたらされることになる。

このようにみてくるならば、《s a r e r u》という文法的なかたちが、いわゆる「自発」という文法的な意味を実現する場合、それがどのような条件のもとでなされてくるのかを確認していくには、形態論上の問題として、いかなる文法的なカテゴリーのもとで《s u r u》のかたちと対立しているか、その体系を確定していくことが必要になるだろう。そして、そのなかで、このカテゴリーに入りこむ動詞のもつカテゴリカルミーニングがどのようなものであるか、それが《s a r e r u》のもつ文法的な意味にどうかかわっているのかをあきらかにできるのだろう。

こういったことを確認しながら、さらに構文論上の問題として、「自発表現の文」がどのような構造的な特徴をもち、どのような意味を表現しているのか、そして、どのようなバリエーションとして発展しているのか、ひとつひとつ具体的に確認していくことが必要になる。構文論の問題として、ひとつの文がどのような意味内容をになわされているかを検討するということは、言語活動全体のなかで、すなわち、はなしあいの構造のなかで、人称性やモダリティもふくめて検討していくことでもある。

- 足立や管を見ると、若かった日の交遊が岸本の胸に浮かんで来る。つづいてあの亡くなった青木のことなぞが聯想(れんそう)せられる。岸本と一緒にその教会堂の石段を降りた二人の学友は最早(もう)青木なぞの生きていた日のことを昔話にするような人達に成っていた。(新生)

文の構造からみれば、思考や感情の対象となっているものが主語の位置におかれ、述語が『s a r e r u』という文法的なかたちをとっているという点では、「うけみ構造の文」とも共通しているのだが、この種の文は、現代日本語の表現としては、おそらく「うけみ」ではなく、いわゆる「自発表現の文」と一般にうけとめられている文のタイプなのだろう。この述語動詞が「うけみ」とおなじ文法的なかたちとりながら、「自発」という独自の文法的な意味を実現しているとすれば、それがどのような意味内容をもっているのか、そしてこの種の文にはどのような構造的な特徴があるのかということである。

この種の文における「自発」というのは、ごくかんたんに一般的にいえば、「自分の内部にひとりでにおこってくる感情や思考のながれ」ということになるだろうが、実際には、おそらく、ただ「ひとりでに・自然に」生じてくるというのではなく、そこには、そういう感情や思考が生じる何らかの契機や別的事象があるのだろう（上の例では、"足立や管を見ると、"）。そして、意味的にみれば、自動詞述語文に近いこともわかるだろう（"交遊が岸本の胸に浮かんで来る。"）。こういった場合に、この表現が「うけみ」や「可能」などの表現とどのように接しながら、どのような独自性をもっているのか、述語動詞の語彙的な意味の特徴、カテゴリカルミーニングとのかかわりのなかで確認して必要がある。もしも、形式的な面だけでいうならば、"聯想(れんそう)する主体としての岸本"をこの文のなかに明示するとすれば、"(岸本には) 聯想(れんそう)せられる"というふうに、一見「うけみ構造の文」と同じ構造になるのかもしれない。しかし、そうであるとしても、この種の文は「うけみ構造の文」としてかたづけることができない、いわゆる「自発表現の文」としての独自

意味的なニュアンスをふくみもつていて、われわれは日常の言語活動のなかでそのようにうけとめているだろう。そうさせている条件は何かということである。この種の文における《s a r e r u》の文法的なかたちに、「感情や思考がひとりでにおこってくる」「みずからの意志的な活動としておこなっているのではない」という文法的な意味がそなわっているとすれば、その対立する文法的なかたち《s u r u》はどのような文法的な意味をもっているのか。それは、このふたつの文法的なかたちが、どういう意味的な対立をなしながら、文法的なカテゴリーを形成しているかということである。

うえにあげた用例でみると、《s a r e r u》のかたちが「みずからの意志的な活動ではない思考のながれ・おのずと非意志的に生ずる思考のながれ」をあらわすと仮に規定するとすれば、《s u r u》のかたちは「主体の意志的な活動としての思考のながれ」をあらわすということになるだろう。となれば、このいわゆる「自発」とよばれる文法的なかたちは、【人間の思考活動における意志性と非意志性】を問題にする文法的なカテゴリーにおける一方の文法的な形式であることになる。《s u r u》が「意志的な思考活動」であり、その対立する文法的なかたち《s a r e r u》は「非意志的な思考のながれ」である。そして、文の文法構造からみれば、《s u r u》の形式では、主語に「思考活動をおこなう主体」がすえられ、《s a r e r u》の形式では、主語に「主体のもとに生ずる思考の内容そのもの」がすえられる。このように考えるならば、この文法的なカテゴリーを形成する動詞は、語彙的なグループの面で、すなわち動詞のカテゴリカルミーニングにおいて、きわめて限定的である。

《s u r u》のかたちにおいて「人間の意志的な活動としての思考をさしだし、その思考の内容を対象として要求する他動詞」ということになる。無意志動詞や自動詞はじめからこの文法的なカテゴリーには入りこまない。「自発」は、「人間の思考活動をあらわす動詞」に限定された文法的なカテゴリーのなかでの文法的な形式ということになる。うえにあげた用例にかぎらず、われわれの日常的な言語経験でとらえられている多くの「自発表現の文」を念頭において、もう少し広げれば、「人間の思考活動・認識活動・心理活動をあらわす」というカテゴリカルミーニングをもつ動詞に限定された文法的なカテゴリーのもと

で、【意志性／非意志性】が《s u r u》と《s a r e r u》との文法的な形式に対立させられると規定することができる。

しかし、これはきわめて単純化した規定であって、研究の出発としてのあくまでの仮の規定である。人間の思考活動というものはつねに意識的であるわけではないし、人間の理性的な思考も、プロセスとしての思考活動そのものから、理性的な判断にいたるまでさまざまである。たとえば、「思う・考える」という動詞を例にとってみても、その語彙的な意味内容には、プロセスとしての思考活動そのものをとらえる側面もあれば、思考の結果としての判断内容をとらえる側面もある。また、人間の思考活動と心理活動、感情との区別と連続、認識活動における感性的な知覚の段階と理性的な判断の段階との区別と連続など、日本語という言語が、この種の動詞グループをどのような語彙体系としてまとめあげているのか分からなければ、「自発の表現」について十分な解決はできないかも知れない。しかし、逆に、この文法的な形式の使用範囲が動詞のカテゴリカルな意味をさぐる手がかりになるともいえる。

さらに、この種の文の構造的な特徴を考えてみると、形式的には主語のかたちである《～が》でさしだされているものは、述語動詞のさしだす思考活動・心理活動の内容そのものであって、その活動の主体である人間が《～には》という補語の位置にすえられることが一般的であるとはいっても、実際には「うけみ構造の文」ほど限定的な構造ではない。「自発」といってもその思考活動の主体は人間自身であり、その主体の側からの表現であるために、文の構造においても、《～は》という主語のかたちで人間がさしだされることもしばしばある。こうなれば、「可能表現の文」や「欲求表現の文」の構造にも共通するように、《～が》でさしだされる部分は、構造上からみても補語ということになる。現代日本語における「自発表現の文」は形式的にも、このふたつのタイプが可能である。

以下、実際の用例をもとに、《s a r e r u》というかたちをとって「自発表現の文」とよばれるような文のタイプとはどういうものなのか、動詞の語彙的な意味のタイプにしたがって分類しながら、その意味内容と構造的な特徴を

検討していく。

## 【1】知覚による確認を表現する文

〈ながめる〉 〈みわたす〉 〈のぞむ〉 のような視覚による知覚をあらわす動詞が、 〈ながめられる〉 〈みわたされる〉 〈のぞまれる〉 のかたちをとつて述語になるばあい、 人間による知覚活動そのものをあらわしているというよりは、 その知覚（視覚）の対象が主語の位置にえられることで、 その対象が人間の目に入つてくるぐらゐの意味あいを表現することになる。 ここでの人間は意志的な主体的な活動の主（ぬし）というよりは、 その対象を確認する主体にとどまるともいえる。 この種の文は、 その知覚の対象が文の主語の位置をしめ、 述語が《s a r e r u》のかたちをとるということでは、「うけみ構造の文」とおなじ構造ではあるが、 意味的には「うけみの文」ではないだろう。 可能表現の文にきわめて近い面もあるが、 それよりもむしろ、 この種の文の実現している意味は、 〈みえる〉 を述語にする「確認の表現の文」の方に近いともいえる。

- 二階は不忍池が見渡せるので、 池の面を蔽うた蓮の花の景色が眺められる。 池の周りをとり巻いて柳が青い糸をたれている。 (私の東京地図)
- 山のすぐ下を、 山陽線の線路がまがりながら通っていた。 村は一目に横の方に見えており、 藪谷の方も眺められた。 白墨で描いたように幾筋かの道も見えていた。 (素足の娘)
- ザクザクと音のする雪の路を、 馬車の輪が滑り始める。 白く降り埋(うず)んだ道路の中には、 人の往来(ゆきき)の跡だけ一筋赤く土の色になつて、 うねうねと印したさまが眺められる。 (千曲川のスケッチ)
- 南向きの座敷に寝ている倫の枕につけた眼からも白い障子にさす陽の影が梅の古木を墨絵のように写し出しているのが眺められる。 (女坂)

- あの土手の上へ登ると、古い松の樹の間には一筋の細道があつて、その頃はそこを歩いてもかまわないようなことに成っていた。そこから樹木の多い市谷の町々が見渡される。煙に添う一帯の平地も見える。……日の射すところは草が青々として見える。  
(春)
- 狹い樓階(はしごだん) を昇り、観測台の上へ出た。朝の長野の町の一部がそこから見渡される。向うに連なる山の裾には、冬らしい靄(もや)が立ちこめて、その間の空虚なところだけ後景が明かに透けて見えた。  
(千曲川のスケッチ)
- 越えて来た松林は暗い雲のようで、ところどころに黒い影のような大石が夜色に包まれて眼に入るばかりだ。月の光も薄くこの山の端に満ちた。空の彼方には青い星の光が三つばかり冴えて見えた。灰白い夜の雲も望まれた。  
(千曲川のスケッチ)
- 窓は四つある。その一方の窓からは、群立した松林、校長の家の草屋根などが見える。一方の窓からは、起伏した浅い谷、桑畠、竹藪などが見える。遠い山々の一部分も望まれる。  
(千曲川のスケッチ)
- 青空には初冬らしい雲が望まれた。一目みたばかりで、皆な氷だということが思われる。氷線の群合とも言いたい。白い、冷い、透明な尖端は針のようだ。  
(千曲川のスケッチ)
- 「ああ復た浅間が焼ける」と土地の人は言い合うのが癖だ。男や女が仕事しかけた手を休めて、屋外(そと)へ出て見るとか、空を仰ぐとかする時は、きっと浅間の方に非常に大きな煙の団(かたまり)が望まれる。  
(千曲川のスケッチ)

これらの例のように、〈ながめられる・みわたされる・のぞまれる〉を述語にする文では、人間が視覚によって確認していることはたしかである。これらの文は、形態論的には《s a r e r u》のかたちをとってはいるが、「うけみ」でもなく「可能」でもなく、意味的には〈みえる〉を述語にする「知覚による確認」の表現に近い。〈見下ろされる・展望される・見晴らされる・見通される・見透かされる〉などもこの種の文をつくる。この《s a r e r u》のかたちによる「知覚（視覚）による確認」は、《s u r u》のかたちの文と対比させてみると、「主体による意識的な知覚活動による積極的な確認」ではなく、〈みえる〉の文と共に通する「可能表現的な意味あいをふくませながらの受動的な確認」「目に入ってくるぐらいの意味あいをもつ確認」ということになるだろう。しかし、この種の視覚的な確認の動詞のはあいにも、《s a r e r u》のかたちのなかに「みずから意的的な活動によるものではない認識」として、「自発」という文法的な意味をもとめることができるかということになれば、そのように言うことはできないだろう。われわれの言語活動の経験のなかでの「自発」という文法的な意味としては、ここにさらに「おのずとわきあがってくるような」という意味あいが付着している。実際には決して「おのずと」ではなく、必ず何らかの契機があってのことだろうが、その「わきあがってくるもの」とは「視覚による確認としてとらえられるもの」ではないのだろう。「自発表現」のカテゴリーのなかに入りこむのは、やはり「人間の思考活動、心理活動、感情をあらわす動詞」のグループだけであって、この種の例のような「視覚的な知覚による認識活動の動詞」の場合には、「自発」のカテゴリーのなかに入れることはできないだろう。

〈みえる〉や〈きこえる〉を述語にする「知覚による確認」を表現する文でもそうなのだが、文脈のなかでの特定の人間が、具体的な時間のなかでおこなっている場合には、「主体によってその確認が実現している（実現した）」という表現になる。しかし、それが、主体によるアクチュアルな実現ではなく、ポテンシャルな可能性としてのみさしだされている場合がある。さらに、主体や時間が一般化されている場合には、場所の特性の表現に近づく。〈みられる〉〈

きかれる)などの場合には、そのような一般化の意味あいが強いものや、どちらかといえば「可能」の表現といった方がいいようなものが多い。しかし、具体的な人間による「確認」の表現といった方がいいものもあって、厳密に意味的に線引きすることはむずかしい。さらに、現代日本語における用例なのだが、「知覚による確認」の動詞の多くは視覚的なものであって、聴覚的な動詞の用例は少なく、かぎられている。

いずれにしても、これらの語彙的な意味のグループは《s a r e r u》のかたちをとっても、「自発表現」ということにはならないだろう。

- 「両岸には、南牧、北牧、相木などの村々を数えることができた。水に近く設けた小さな水車小屋も到るところに見られた。(千曲川のスケッチ)
- 並木街をノオトル・ダムの分院の前あたりまで歩いて行くと、その辺には漸くマロニエの青い芽が見られた。 (新生)
- 狹い、ごちゃごちゃした町中のことで……妊娠預所、厚焼せんべい、又は子供を相手に飴、豆、駄菓子その他粗末な玩具の類を鬻(ひさ)ぐ家々などが見られる。その濡れた屋根の上に、雨降揚句の空を望むことができる。 (春)
- 白々と明放れた頃に、岸本は家を出た。明神を左に見て、湯島の坂を下りようとすると、四月らしい朝の空気のなかに下町の町々が見られる。遠く光る霞が彼の眼に映る。 (春)
- 自動車から見える対岸の山の斜面には、雑木の緑色に混じって、ところどころに、遠い山桜の花が見られた。 (氷壁)
- シャトレエの広小路まで歩いた。そこまで行くと、いくらか巴里らしい

人の往来(ゆきき) が見られた。

(新生)

- けれど、きこえるのはたいていなき声で、ヤッチャンのわらう声はめつたにきかれません。

(壺井栄)

## 【2】判断を表現する文

〈ながめられる・みわたされる〉などが視覚（知覚）による確認を表現しているとすれば、その確認のし方に思考や推察が加わっている場合には、「判断」を表現している文ということになる。〈うかがわれる・うなづかれる・納得される・了解される〉などを述語にする文では、文の主語にすえられているものは、対象というよりは判断の内容であって、事実やできごとに対して思考や推察を加えながらそこに何かを見いだし、判断するといったような「発見的な判断」という意味合いをもっている。

- 晶彦の生活ぶりには、目に立つほどのものはなかった。贅沢でもなければ、派手でもない。着るものも木綿のパジャマとか、ウールのきものに浴衣を重ねるとか、フランのズボンにねずみ色のカーディガンとかいった、ごく普通の目立たない服装である。食事も病院のものを文句なく、けっこうよく食べる。特別なものを家から運ばせるようなことはなかった。だがよくみると、こまごましたところに本来の生活の豊かさがうかがわれた。たとえばパジャマの生地が最高の木綿を使っており、ウールのきものの肩すべりには羽二重がつけてあり、浴衣も竺仙の染めなのだったし、紅茶に添えるレモンは絶やさず、茶匙は銀、くだもの皿やコップは切子、枕許の時計はスイス、掛けている毛布はどこの国のか、しなやかで軽く、枕カヴァはイニシャル入り、シーツは幅広で丈長、スリッパのフェルト底は厚い。

(闘)

- ……正三が事務室の方へ立寄ってみると、清二是ひとり机に凭(よ)って、

せつせと書きものをしていた。工具に渡す月給袋の捺印とか、動員者に提出する書類とか、そういう事務的な仕事に満足していることは、彼が書く特徴ある筆蹟にも窺(うかが)われた。判で押したような型にはまつた綺麗な文字で、いろんな掲示が事務室の壁に張りつけてある。 (原民喜集)

- 老人の行友が若い須賀を前に坐らせて一つ膳で箸を動かしていると、妻とも娘とも見えない一種の馴れた男女の関係がそこに滲んでいて、見ているものは一眼で須賀が何であるかがうなずかれるのであった。 (女坂)
- 恐しいもので、この「茶碗の湯」を数行よみかけたら、これは寺田先生以外には誰も書けないものだとすぐ直感された。それは、文章の良い悪いなどの問題では勿論なく、また内容が高級で表現が平易であるなどということを超越したものであった。強いて言えば、それは芸が身についた人の芸談にあるような生きた話であった。 (中谷宇吉郎集)

この種の文における「判断」というのは、ただ自然にひとりでに勝手にうまれるというものではなく、何らかの具体的な事実を人間が確認し、その事実(できごと)に対する思考が加わってなされる「確認にもとづいた発見的判断」ということになるだろう。もちろん、確認にもとづいた判断といっても、そこには人間の推察的な要素も加わった上での思考の可能性もあり、主観的な判断であるかもしれないが、この種の文は、「知覚的な確認そのもの」ではなく、発見的な要素もふくんだ「思考による判断の表現」の文ということになるだろう。これらの判断は決して「ひとりでに・おのずから」生じてくるものではなく、根拠をもってみちびかれている。

〈のぞかれる・判じられる・見受けられる・予想される・了解される・覚られる・推察される・推せられる・察しられる・錯覚される・判断される・見直される・納得される・確信される・受け取られる・認められる・聞きなされる・予覚される・見いだされる・見かけられる・計られる・解釈される・疑われる・

読まれる) などがこの種の文の述語の例としてあげられる。

- 忽蘭は言った。そこには心を決めた者だけがもつ居坐った気持ちが覗かれた。 (蒼き狼)
- 何となく大勢の中にいる時でも、唯でない仲の男女のそれとなく通わす秘密な眼使いですぐそれと解るのである。その勘で判断すると須賀と紺野の間にはまだそういう秘密の生じていないことが倫には判じられる。  
(女坂)
- お志保は何か言いたいことが有ってわざわざ自分のところへ逢いに来たのだ、とこう気が着いた。あの夢見るような、柔嫩(やわらか)な眼—それを眺めると、お志保が言おうと思うことはありありと読まれる。 (破戒)
- 家庭を離れようとしている母に一種の魅力を感じていた。母がその良人から離れようとする。父が母のあとを追ってアパートに訪ねてくる。父は母を再び引き戻そうとする。母は引き戻されまいとして抵抗する。そういう男性と女性とのいきさつのなかに(大人) の生活が察しられる。  
(幸福の限界)

この種の文における「思考による判断」が決してひとりでに、おのずと生ずるものではなく、主体による確認をとおした根拠にもとづいてなされているとしても、《s u r u》という文法的なかたちではなく、《s a r e r u》のかたちを選択しているとすれば、ここにはどのような文法的な意味がこめられているのだろう。「察したり」「読みとったり」「判じたり」するのは人間主体であって、意志的な思考活動をとおして根拠にもとづいて得られた判断の内容である。その判断の内容は「おのずと」生じてきたものではないはずである。《s u r u》のかたちをつかえば、【主体の意志的な思考活動とその結果として得られた判断】の内容を、思考する主体である人間の側からさしだすことによ

なる。では、《s a r e r u》のかたちをつかうことによってどのような文法的な意味をうみだしているかということである。たとえ、人間主体による確認と、それにもとづいた思考活動による判断であったとしても、その判断の内容を文の主語の位置にすえて、判断の主体である人間を補語の位置にすえることによって、その判断の内容が「決して主体の意志的な思考活動によってなされたものではなく、向こうから自分の方にやってきた」、あるいは、「事実的な確認をあつめての論理的な必然や可能性としてはそういう判断になるしかない」という意味をつくりだしている。すなわち、この種の「思考的な活動とその判断をあらわす動詞」の場合には、《s a r e r u》のかたちは【判断における非意志性（非積極性）】という文法的な意味をもつことになる。この種の文の述語動詞が、形態論的には「うけみ構造の文」とおなじ述語形式であり、その判断の主体を文のなかに明示するばかりには、（倫には判じられる）のようになり、文の構造としては「うけみ構造の文」とおなじであるということや、「可能表現の文」との意味的な区別がつきにくいというのは、決して偶然のことではない。これらの文は、ばらばらに存在する文法的なホモニムではなく、《s a r e r u》のかたちのもつ文法的な意味である「うけみ性（非能動性）」を中心にして連続しているともいえる。

この種の動詞グループにおける《s a r e r u》の文法的な意味【判断における非意志性】というのは、うらをかえせば、「意志的な思考活動に対する責任のがれ」の表現ということになる。われわれの言語活動の経験において「自発表現の文」としてうけとめられている文のタイプには、この種の動詞グループも一役かっているのかもしれない。実際、この種の動詞グループにおける《s a r e r u》のかたちは、われわれの現代日本語の日常会話のなかで「人間関係の緊張をさけるための言い回し」となって、よくつかわれる。さらに、使用がひんぱんになれば、文法的なカテゴリーのなかでの《s u r u》と《s a r e r u》との文法的なかたちの対立がすりきれてしまい、もはや特定の動詞の特定の文法的なかたちとして定着し、《s a r e r u》のかたちしかつかわれなくなる。〈うかがわれる・うなづかれる・のぞかれる〉などは、対

立する《s u r u》のかたちと語彙的に照応しなくなっている。さらに、この《s a r e r u》のかたちが、人間関係への配慮のための文法的な意味あいを色濃くするにしたがって、しだいにモーダルなタイプの文へと移行していくことになるのだろう。

### 【3】感情や思考を表現する文

《s a r e r u》を述語にして、人間の内部に生じる心のうごきや思いを表現する場合がある。この種の「感情を表現する文」や「思考を表現する文」が、「自発表現の文」として一般にうけとめられている文の典型的なタイプなのだろうか。述語動詞の文法的なかたちとしては、この種の文も「うけみの文」や「可能表現の文」とおなじであるが、その文法的な意味はことなっている。この種の文における感情や思考は、人間の内部におこる心や頭のうごきということになるだろうが、それとて、自然にひとりでにわきあがってくるというものではなく、何らかの外的な状況（ものごと）によって引き起こされたり、何らかのものごとに対して向けられたりする心のうごきということになるだろう。「心のうごき（感情）」と「頭のうごき（思考）」を厳密に区別できるものではないが、ひとまずそのようなものとして考えられるものをあげてみる。

#### ① 感情（心のうごき）

- 「知るもんか」鮎太は言ったが、そんな冴子の言葉は、恐らくあの加島という大学生の影響であろうと思った。しかしそれを口にするのは、何となく、鮎太には憚かられた。  
(あすなろ物語)
- ある日、彼はすぐ近くにある、井の頭公園の中へはじめて足を踏んでみた。ずっと前に妻と一度ここへ遊んだことがあったが、その時の甘い記憶があまりに鮮明だったので、何かここを再び訪ねるのが躊躇されていたのだった。  
(原民喜集)

- 島村はまた汽車のなかで師匠の息子を介抱していた葉子の姿を思い出して、あの真剣さのうちには葉子の志望もあらわれていたのかと微笑まれた。「それじゃ今度も看護婦の勉強がしたいんだね。」  
(雪国)
- それがことごとく押しのたらなかったことに帰結するのでございます。  
もう一押しして突っこめば、あの事件は解決したろうにとくやまれるのでございます。  
(点と線)
- 倫のしつけがきびしいので、悦子は須賀や女中と一緒にいる時の方が生々して子供らしく見える。須賀にもそういう悦子の無邪気により添つて来る氣分は自然に親しました。  
(女坂)
- 「こんどはわたしはこの幕舎に残りたいと思う。出陣がもう少し暖かくなつてからなら悦んで従軍するが、この気候ではガウランの健康が案ぜられる。」  
(蒼き狼)
- 子供は海から帰宅させて暫くでも家庭の空気をおくつてからと願うのは広介の空想に終るらしい。明子の神経の状態ではそれはますます彼女を苦痛にし、最後を荒々しくするばかりであろう、とおそれられた。  
(くれない)
- 聞いてみれば聞いてみるほど、あの政事家の内幕にも驚かれるが、又、この先輩の同族を思う熱情にも驚かれる。  
(破戒)

この種の文では、自分がだれか他の人間の感情の客体となって、だれかにそのように思われているということを表現しているのではなく、自分自身の感情、心のうごきを表現している。形態論的には《s a r e r u》という文法的なかたちをとっているこれらの動詞を文の述語にすえていても、この種の文を「う

けみ」を表現している文であるとはいえないだろう。文の主語の位置にそのような感情の対象、内容となるできごとをさしだしながら、自分自身の感情、心のうごきを表現している。主体である人間の感情の表現であって、"驚く"主体であり、"おそれる"主体であり、"くやむ"主体である人間の側からの表現の文である。文の構造としては"鮎太には憚かられた"のように「うけみ構造の文」と一見おなじようではあっても、意味的には「うけみの表現」ではないだろう。《suru》という文法的なかたちに、人間主体の感情や心理活動における【意志性（能動性）】の意味をふくみもたせ、《sareru》のかたちに、【非意志性（非積極性）】の意味をふくみもたせながら、対立させていることになる。この種の文における感情は、決して、いわゆる「自発」として「ひとりでにわきあがってくる」わけでもないのだが、あえて《sareru》というかたちを選択することで、【非意志性（非積極性）】の意味あいをかくれみのにしながら、〈おどろく・躊躇する・憚かる・おそれる・くやむ〉という感情を「やわらげながら表現するための文」のタイプといった方がいいのかもしれない。形式的に「うけみのかたち」をもちいることによって、「感情の主体であることをおおいかくす・何かのできごとによって自分がそのような感情をひきおこされた」のだという「責任をのがれる表現」とでもいったら言いすぎだろうか。《suru》と《sareru》の対立を【意志性と非意志性】の対立としてさしだしながら、《sareru》という文法的なかたちをえらびだすというのが、「自発表現の文」の実際の姿なのだろう。

〈愛惜せられる・危ぶまれる・待ち受けられる・微笑される・苦笑される・惜しまれる・心配される・気遣われる・気がおかれる・哀れまれる〉などのタイプの感情をあらわす動詞の場合にこの種の文がつかわれ、「主体の積極的な意志的なものではないが、そのような感情が人間の内部におこつてくる」ぐらいの意味あいを表現する文（実際には、「ひとりでに」ではなく、当然なんらかのきっかけがあるのだが）ということになるだろう。この種の文が、現代日本語の文のタイプとして、こういった意味あいを表現するための独立したひとつのタイプをなしているものとして考えるならば、「うけみ表現の文」や「可

能表現の文」のバリエーションとばかりもかたづけるわけにはいかないのかもしれない。「うけみ構造の文」の文と構造的に同じスタイルをとりながら、「うけみ」や「可能」の意味あいとも接しながら、ある程度独自の文法的な意味領域をつくりだしているともいえる。それでも、動詞の語彙的な意味のグループ、そのカテゴリカルな意味の面で考えるならば、この「自発」の意味領域に入り込んでくる動詞は、相當に限定的である。

## ② 思い（思考・頭のうごき）

思い（思考・頭のうごき）をあらわす動詞のばあいにも、感情（心のうごき）をあらわす動詞と同じ構造で、似たような意味あいを表現することができる。

- 六千坪の草原は半ば以上拓かれて、趣のある日本式の庭園になっていた。そしてその中に小さく建っている茅葺の家まで、庭園の一つの景物となっているのにも、伯父らしい用意が偲ばれた。(中谷宇吉郎集)
- 夫が生きていてくれたら一自分のうちを持っていたら一今日はちょっと弾んだ食卓にして、お祝いをしてやるのにといった家庭団欒(だんらん)がせつなく思い描かれた。(闘)
- 仕事がすんでゆっくり煙草をすいながら、静かな雨の音を聞いているうちに妙な想像が浮かんで来た。三毛がほんとうにどこかへ捨てられて、この雨の中をぬれそぼけてさまよい歩いている姿が心に描かれた。(寺田寅彦集)
- 枢(ひつぎ)は竈(かまど)の方へあずけられて、彼は皆と一緒に小さな控え室で時間を作っていた。何気なく雑談をかわしながら待っている間、彼はあの枢の真上にあたる青空が描かれた。妻の肉体は今最後の解体を遂げているのだろう。(わたしが、さきにあの世に行ったら、あなたも救って

あげる) いつだつたか、そんなことを云つた彼女の顔つきが億(おも)いだされた。

(原民喜集)

- 「諸君の手ではとても栽培はできませんよ。」と言つた前の助役のことばが、今さらのように思い返されました。 (山本有三集)
- かたまって肩へ落ちてくる毛、変ってゆく姿を鏡の中で見ている明子は、始終心の隅に、今別れて来た広介のことを追っていた。すると、一度も來たことのない明るい床屋の椅子に髪を切っている自分が、想像の中の広介たちに対比されてひとりうらぶれて考えられた。 (くれない)

〈回想される・思い合わされる・空想される・懷慕せられる・思い出される・想像される・思いやられる・待たれる・かえりみられる・意識される〉などのように、人間の思考活動、思い（頭のうごき）そのものをあらわす動詞の場合にも、このような《s a r e r u》のかたちをつかった表現がなされる。この種の文でも、感情をあらわす動詞の場合と同じように、「主体の積極的な意志的なものではないが、そのような思いが人間の内部におこつてくる」ぐらいの意味あいを表現していることになるだろう。しかし、こういう「思い」というものも、ただひとりでに自然に人間の内部にわきあがつてくるというのではなく、何らかのきっかけとなる事象にふれたり、自分自身の思考活動のプロセスの帰結として、あるいはそのプロセスの途中において生じたりするものなのだろう。実際の文脈のなかにそのことがはっきりと表現されている場合も少なくない。この種の思考活動をあらわす動詞の場合にも、《s u r u》ではなく、《s a r e r u》を選択することによって【思考活動における非意志性（非積極性）】がこめられることになる。

- 今年も初霰(はつあられ) のたばしる音を聞くと、十勝の生活とこの老人のことが思い出される。 (中谷宇吉郎)

- 明子は堪えていたが、とうとうぽろっぽろっと涙をこぼしていた。話してゆくうちに、十年の自分の一生懸命な姿が、今は我が身ひとつなので、よけいにいとしく思い出された。(くれない)
- 気がゆるんだせいか暑さが強く感じられ、坐っていると無闇に眠くなつて気が遠くなつて行くようだ。しかし寝ころんで目を閉じると、川原や山の麓から立ちのぼる無数の煙が思い出されて来て眠れない。(黒い雨)
- この日も、また成吉思汗は己が帳舎に帰ると、亡き忽蘭のことを思つた。こうした場合、必ず忽蘭のことが思い出されて来ることが不思議だった。(蒼き狼)
- 自分の部屋にきめられている玄関の三畳に引っこんで、机の前でひとり思案にくれていました。純の心の中に、いろんな出来ごとが思い出されました。(壺井栄)
- 台所のそばに住んでおりながら、格別意に止めずにいたその場所も、廃寺のあととおもうと、たんぼの間を流れていた音無川の昔の風景にその寺が生きて想像される。(私の東京地図)
- 自分は胡坐（あぐら）のまま旅行案内をひろげた。そして胸の中でかれこれと時間の都合を考えた。その都合が中々旨く行かないので、仰向（あおむけ）になって少時（しばらく）寝てみた。すると三沢と一所に歩く時の愉快が色々に想像された。(行人)
- それは広瀬(ひろびろ)とした千曲川の流域で、川上から押流す泥砂の一面に盛上ったところを見ても、氾濫の凄じさが思いやられる。(破戒)

- 眼の下に動く兵卒等の軍帽を包んだ紺の布や、防寒用の新服はいずれも  
酷く汚れて、風雪の労苦が思いやられた。 (新生)
- 高原の秋は今です。見渡せば木立もところどころ。枝という枝は南向に  
生延びて、冬季に吹く風の勁(つよ)さも思いやられる。  
(千曲川のスケッチ)
- 食堂を出ると、彼はもっと夕暮の巷を漫歩していたくなつた。外で食事をとったり、帰宅を急がなくともいい身の上になったことが、今しきりに  
顧みられた。 (原民喜集)

### ③ 言語活動的

- その力が因縁というものなのだろうかと倫はやっとこのごろになって自分の頑ななまでに守って来た人生に対する倫理よりも強いひき切れないもののあることを、如実に感じはじめていた。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏  
という称号が倫の口のうちに自然につぶやかれ、時にそれは唇の熟するまで烈しい触れ合いで無心に称えづけられることがあった。 (女坂)
- コスモスに 句をいそがるる 別れ哉(かな)  
蓬(ほう)  
と贊をされた。  
この幅(ふく)が立派に表装されたところで、書斎の床の間にかけて、一人で眺め入った。そしたら仙台の秋が近々と蘇って来た。 (中谷宇吉郎集)

このような例はあまり多くはないが、このようなものは、感情や思いそのもののばかりでなく、それらの感情によってつきうごかされるかたちで、言語活動として、実際の行動としてなされるということを表現しているのだろう。  
 〈つぶやく・いそぐ〉 主体である人間の側からのべながら、この種の《s a r e r u》のかたちをとることで、感情や思いの場合と同じように、「自分の意

志的な活動としてではなく、外的な力によって、そのような思いが生じ、それが言語として発せられる」というような意味を表現することになる。この種の言語活動の文でも「内部から自然にわきおこってくる」という、いわゆる「自発」の意味を表現する文となる。しかし、こういった例はあまり多くはない。「感情や思いの延長としてそれが口から発せられた」というあたりまでは可能であるとしても、これが、さらに人間の意志的な具体動作や人間活動をあらわす動詞〈こわす・たたく・はこぶ〉のようなものにまで使用できるかといえば、現代日本語のなかではそれは不可能であるだろう。

こうしてみてくるならば、「自発表現の文」のもつ意味が、はじめに述べたように「自分の内部にひとりでにおこってくる感情や思考のながれ」というものであるとするならば、《s a r e r u》のかたちは、「人間の感情や思いを表現する」というカテゴリカルミーニングをもつ動詞のわくのなかでの、【思考活動や心理活動における意志性／非意志性（積極性／非積極性）】のカテゴリーにおける一方の文法的なかたちということになる。そして、このかたちを述語にする文が、現代日本語においても「自発表現の文」というひとつの文のタイプとして、「意志的・主体的ではない、外的なものによって生じさせられる感情や思いの表現」から、ときには「責任のがれ的な表現・人間関係における緊張をやわらげるための表現」となって使用されているのだろう。この種の文はその動詞の語彙的な意味の領域においては限定的でありながら、「うけみ構造の文」「可能表現の文」、あるいは「知覚による確認の表現の文」と接しながらひとつの独自のタイプをなしているということになるのかもしれない。ただ、「可能表現の文」「確認表現の文」のタイプが、その主体の一般化にともなって、ものごとのもつ特性や属性や能力を表現する文に移行していくのとちがつて、この種の「自発表現の文」では、その感情や思いの主体はつねに具体的な人間（基本的には1人称の人間）であって、人間主体の具体的な感情や思いがのべられる。

しかし、この種の文がのもつ、感情や思いの「表現のやわらげ」的な意味あ

いは、特定の文法的なかたちとむすびつき、使用が固定化するにしたがって、しだいにモーダルなタイプの文のつくりだしへと移行していくことになる。〈～のように思われる・～と考えられる・～に感じられる〉などは、しだいに合成述語的に使用され、「思う・考える・感じる」という動詞の語彙的な意味がうすめられ、文法化していく。

#### 【4】モーダルなタイプの文への移行

〈思われる・考えられる・感じられる〉を述語にする文についていえば、何らかの事象をきっかけにして自分の内部に生じた「思い・考え・感情」そのものを表現するものから、さらに〈～と 思われる（考えられる・感じられる）・～に・～のように・～のごとくに〉のようなタイプの文の姿をとることで、「判断」を表現する文やモーダルな述語に移行し、文のあらたなモーダルなタイプをつくりだしているとみることができる。

つぎのようなものは、まだ、人間の「思い・考え・感情」そのものを表現している文として、【3】のタイプの文と同じものだろう。〈思う・考える・感じる主体〉は人間それ自身なのだが、この《s a r e r u》のかたちをとることによって、その「思い・考え・感情」が自分の意志的な活動としてなされるのではなく、自然に、いわゆる「自発的に」生ずるということを表現することになる。

- ……サン・テチエンヌ寺の立つ高い岡の上に登ってあの古い寺院を背後（うしろ）にした眺望の好い、遊園の石垣の上から耕作と牧畜の地たるリモオジュの町はずれを眺めた日から、しみじみ欧羅巴(ヨーロッパ)へ来てから以来(このかた)の旅のことが思われた。  
(新生)
- 明子は子守歌を歌いながら別のことを考えていた。国府津で岸子とも話合いながらやはり未解決のままに残っている問題に苦しんでいたために、現在の明子にはこういう家庭的な、些細なこともすぐそれと結びついて、

強く考えられるのであった。

(くれない)

- 酒倉の内部へはいることには言い知れぬ魅力があった。一步足を踏み入るとそこだけが持つ冷んやりとした酒臭い独特の空気が感じられた。  
(しろばんば)

- 肩をふって走ってゆくそのうしろ姿には、無心に明日へのびようとするけんめいさが感じられる。  
(二十四の瞳)

しかし、〈考えられる〉に関していえば、意味的には「可能」の表現ともうけとができるだろう。また、〈感じられる〉のばあいも、触覚や視覚のような感覚でとらえられるもの、空気や気配、状況、内面的な心情、抽象的なものなどが主語におかれて、そのまま「うけみ」の表現ともうけとができるし、あるいは「可能」の表現ともうけとることもできるのかもしれない。

### ① < ~と 思われる (考えられる・感じられる) >

これらのタイプの文における「判断の内容」は、ひとつの名詞でさしだされることもあり、文としてさしだされたり、動作としてあらわされたりすることもあるが、この種の文では、人間が知覚によって確認した物事や現象や人のありさまについて、自分がどのようにうけとめているか、そこから何が考えられるか、自分の「判断」をのべていることになる。あるいは、そこからうけとった「感覚」をのべている。

- 三沢の泊った宿の名を聞いて、其処へ偉で乗り付けた。看護婦はつい近くのように云ったが、始めての自分には可なりの道程(みちのり)と思われた。  
(行人)
- 大事になるのが恐ろしくて、そっと辻(すべ)り出ようとする広介の考え方

や態度が明子には、子供たちに対する彼の愛情の薄さだと思われた。

(くれない)

- すると、明らかに大人と思われる小柄な女性が現われた。顔も若く、声も若々しかった。まだ三十歳をそれほど多くは出ていないと思われた。

(おろしあ国酔夢譚)

- 二人の異人は焚火の傍に正体なく打ち臥していた。焚火が燃えているところをみると、時々目を覚ましては、薪を火中に投じてゐるものと思われた。

(おろしあ国酔夢譚)

- 「はあ。自分に電話がかかってくるはずだと、女中にも言い、私にも言つていました。電話がかかってきたら、すぐに取り次いでくれとおっしゃるのです。どうも、毎日外出もなさらなかつたのは、そのためではなかつたかと思われます。」

(点と線)

- 高松由岐子にとっては眩しい日であった。眼にうつるもの悉くまぶしかつた。道に行き遭う人たち、すれ違う赤の他人までも、みんな昨夜の由岐子の行動を知つてゐるのではないかと思われた。

(幸福の限界)

- こうした美那子の自分に対する心の姿勢というものは一体いかなる性質のものであろうか。愛情に関するものとも思われるし、また全くそれとは裏腹なものとも考えられる。しかし、いずれにせよ、夫に不快感を感じさせまいとする妻の配慮であることは間違いないし、そう考えればやはりそれはそれで愛情と呼んでいいものであろう。

(水壁)

- 四、五日は過ぎたが、富岡はやって来なかつた。長野から戻つていつうなものだと思いながらも、やって来ないところを見ると、あの手紙は富岡の手にはいっていないのかも知れないとも考えられる。

(浮雲)

- お互いの理想は変わらぬとはいえ、毎日の家の中で自己を押し出す欲望が強くなり、摩擦が激しくなるにつれて、彼女は疲れて來たのである。同時にそれは避けることの出来ぬ矛盾ではないかとも感じられて來た。

(くれない)

- 父は洋服に着更えてどこかへ出掛けていった。日曜日は何となしに周囲が生き生きと感じられる。

(素足の娘)

この種の〈～と思われる・考えられる・感じられる〉の文では、主体の判断や感覚の内容をのべながらも、それが意志的なものとしてなされているのではなく、何とはなしに自然にそのような判断や感覚が生ずるというような、いわゆる「自発」の表現ということになるだろう。しかし、これらの判断や感覚もまた、「可能」の表現の意味あいをともなっている面があり、区別がむずかしい。

つぎのような否定形の場合には、いわゆる「自発」的な判断が生じなかつたということではなく、「否定的な判断」をおこなっていて、やはり、その否定的な判断が自然に生ずるというような表現ということになるだろう。しかし、この種の文の否定形のばあいは、「可能」の意味あいの方がつよくなり、「自発」の意味あいというよりは、「そのように判断したり、感じたりすることが不可能である」という表現になるのかもしれない。

- 「天気は大丈夫でしょうが、でも、ひょっとすると午後は雨になるかも知れない。ゆうべ、月が傘をかぶっていた」Sさんはそんなことを言ったが、かおるには午後雨が来ようとは思われなかつた。空は青く澄み渡っているし……
- お玉は首をかしげていたが、ひとりごとのような調子で言い足した。

「どうも悪い人だとは思われませんわ。まだ日も立たないのだけれども、悪いことばなんぞはかけないのであります。」  
(雁)

- 寝足りた頭で考えてみると、どう考えようと、自分の採った行動も、今朝この家で為した信子との応対も、正常なものとは思われなかつた。

(あすなろ物語)

- 「でも、主人、どうでしょうか」美那子は言った。かおるの言うとおりに違ひなかつたが、教之助にもう一度ザイルの切り口のことを持ち出す勇気もなかつたし、教之助がそれを受けつけようとも思われなかつた。

(水壁)

- だがどうしたのだろう。明子には広介が女との決定的なことで外泊するとは考えられなかつた。  
(くれない)

- 鉄木真の心は、今までに経験したことのない奇妙な戸惑いを感じていた。眼の前にいる女性は美しいということで少しも非力には見えなかつたし、しなやかな躰を持っているということで男に劣っているとは考えられなかつた。  
(蒼き狼)

- 時々燈明がぼうっと明るくなると、仏壇の中の仏像だの、色々な金色の仏様の掛軸だのが、浮いて見えた。そして孫悟空のいた時代がそう遠い昔とは感ぜられなかつた。  
(中谷宇吉郎集)

〈～と 思われる・考えられる・感じられる〉のような、〈～と〉をともなう、このタイプの文は、〈～と みえる・きこえる〉のタイプの文と意味的にはきわめて近く、同じく「判断」をあらわす文のひとつのタイプをつくりだしている。〈みえる・きこえる〉の方が「知覚にもとづいた判断」であるのに対して、〈思われる・考えられる・感じられる〉の方は、「確認した物事や現象

について、ある程度の思考をともなった判断であり、その判断にもとづいた見解」を表現しているということもできるかもしれないが、それほど明確な区別があるわけでもないだろう。いずれにしても、〈思う・考える・感じる〉というかたちではなく、〈思われる・考えられる・感じられる〉というかたちをとっているこの種の文が表現している文法的な意味が何かという問題である。一般的な「自発表現の文」とおなじく《s a r e r u》のかたちをとりながらも、ここには「可能・不可能」の意味あいもつきまとっている。「自発」のもつ「判断における非意志性（非積極性）」の表現とばかりもいえないだろう。

つぎのように、《s a r e t e - i r u》のかたちをとりながら、主体が一般化されている場合には、モーダルな意味の表現ではなく、一般的な主体による「うけみ」の意味をあらわすことになる。

- まだ品子は、大泉バレエ団の花形バレリイナとか、第一バレリイナではないのを、野津が好んで、パ・ド・ドウの相手にえらびたがるのだった。  
二人が恋愛をし、結婚をするのは、自然のなりゆきと、はたからも思われている。  
(舞姫)
- 山からいきなり海に落ち込んでるような急な傾斜地なんで、海水浴は無理だ。波も荒いしな。だから、昔から観光地としての利用価値はないと思われていた。  
(レベル7)
- 子供たちには、殊に下級生たちには、学校の先生は、世にも怖しいものと考えられていた。  
(しろばんば)
- 当時小説家になるには早稲田の文科を卒業するのが早道だと一般に考えられていた。  
(黒い雨)
- しかし外国、とくに英國などでは、ユーモアというものは、美德と考え

られている。

(中谷宇吉郎集)

- 人間の身体から或る種の作用線が出るという考えは、古代からあるのであって昔の英雄や豪傑は、殆ど皆その能力を持っていたと一般には考えられて来ている。  
(中谷宇吉郎集)

こういった例とくらべてみれば「自発表現の文」というものは主体が具体的な人間（おおくは1人称の）であることがわかるだろう。

## ② < ~に 思われる (考えられる・感じられる) >

このタイプの文は、上記の <~と思われる (考えられる・感じられる) > のタイプの文と、構造的にも意味的にも、よく似かよっているところがあつて、いずれも確認した物事や現象に対する判断や見解、認識的な態度を表現しているともいえる。しかし、その判断や態度にはちがいもみつけることができる。

<~と>の場合には、具体物や具体的な人間、人間の行動やふるまい、できごとや現象や事象をうけとめて、それらの事象そのものに対する判断をさだしているのに対して、<~に>の場合には、それらの行動やできごとのなかから、その具体物や人間にそなわっている特性の方をうけとめて、それらを判断の内容としてさだしているといえる。

- 「鉄木真！」それに応えるようにボルテも名を呼んだが、その口調は限りなく優しいものに鉄木真には思われた。  
(蒼き狼)

- ゆき子は、妙に時計にこだわっている、高価な時計を買ったりしている富岡の心沙汰が、情の薄いものに思われてきた。  
(浮雲)

- 日本の漂流民たちには、この年の冬は恐ろしく長いものに思われた。  
(おろしあ国酔夢譚)

- 美那子は先刻魚津がこの世で冬山の氷の壁を見せたい人物があるとすれば、それは自分だと言ったことを思い出したが、その魚津の言葉が、いまになってみると、ひどく無力なものに思われて來た。 (氷壁)
- 国是としての鎖国というものがいかなるものか、根室に上陸するまで考えてみなかつたということは、われながら甚だ迂闊なことに思われた。 (おろしあ国酔夢譚)
- 大体一国の最高権力者が女人であるということからして、光太夫には理解できぬことであったが、その上に兵を動かす指揮権をも実際に持っていることが不思議なことに思われた。 (おろしあ国酔夢譚)
- それでいて、佐分利信子の前へ立つと、そうした自分が、ひどく卑屈で、無能な人間に思われて來るのが悲しかつた。 (あすなろ物語)
- 女帝エカチェリーナ二世は、年齢のほどを感じさせない点ばかりでなく、光太夫には一点理解し難い不気味なものをもつた美しい権力者に思われた。 (おろしあ国酔夢譚)
- そして魚津を会社まで訪ねて行く仕事がひどく割の悪いいやな仕事に思われて來た。 (氷壁)
- それさえ、明子は生活の変革を捨てばちにのぞんでいた自分の、広介に対する薄情さにも、気の強さにもおもわれ、厭な気がした。 (くれない)
- が、この経験ふかい年配者の婦長には、こうよく整頓されていることは、よくない辻占の証拠に思われた。 (闘)

このために、〈～に〉のかたちでさしだされているものが、特性をあらわす抽象名詞なのか、形容詞そのものなのか区別がつかない場合もある。

- 梅子は平生の好奇心にも似ず、高木に就ても、佐川の娘に就ても、何等の質問を掛けず、一言の批評も加えなかつた。代助にはその澄した様子が却って滑稽に思われた。  
(それから)
- 「お乳が多くって……子供が居なくなったら困りますわ」などと悲しそうにもなく言うのが倫にはかえって不憫に思われた。  
(女坂)
- こうした苦しさを妻に与えて、平氣でいる良人は地獄の鬼のように無情に倫には思われた。  
(女坂)
- 光太夫にはロシア軍の強いことは納得できたが、それが女帝エカチエリーナの武人としての性格に歸せられていることが奇異に思われた。  
(おろしあ国醉夢譚)

（不安に・不思議に・無難に・変に・不気味に・奇妙に・厭に・不仕合せに・奇怪にあわれに・不可能に・無念に・奇風に・気の毒に・不名誉に・困難に思われる）

（～に 考えられる）では、（～に 思われる）よりも、思考が加わってうけとめるという意味あいが強いせいか、「可能」の表現という面が強いようにも思えるが、否定形の場合に特にそうだというだけのことかもしれない。

- 美しいと言えば英子も貞子もそれぞれ花の美しかったが、鮎太自身にとっては、二人は到底愛情の対象には考えられなかつた。  
(あすなろ物語)

- もしも、おせいに行きあっていなければ、富岡の冷酷さがますます底気味の悪いものに考えられて来る。  
(浮雲)
- 私はうしろ手に入口の襖を閉め、初めて自分を自分で見るような気がした。秘密というものが、自分ひとりのものではない、ということが、変な風に考えられた。  
(素足の娘)
- 寝ている加野の現在の風貌からは、南方の生活の様子は仲々思い出せないのである。まるで違った人の顔をして、そこに横たわっているのだ。二人には何の過去もなかったような、赤の他人同士の間柄にしか考えられない。  
(浮雲)

（～に 感じられる）の場合も、（思われる）に近い意味あいを表現しているが、さらに感性的な意味あいが強く、物事や現象のなかに何らかの特性や性質を感覚的にうけとめ、それを（～に）の内容としてさしだしている。

- 女がふっと顔を上げると、島村の掌に押しあてていた瞼から鼻の両側へかけて赤らんでいるのが、濃い白粉(おしろい)を透して見えた。それはこの雪国の夜の冷たさを思わせながら、髪の色の黒が強いために、温かいものに感じられた。  
(雪国)
- それから今日まで、八代美那子には小坂乙彦がこの世の中で一番気になる青年になっていた。小坂の真面目さも、小坂の純真さも、小坂の一途さも、みんな却って美那子には恐ろしいものに感じられる。  
(氷壁)
- 私は熱気の籠(こも)るトラックの助手席で幾度か迷妄状態になった。傍にいた介添の妻も疲労のため二度ほど失神状態になった。三時間の道程だが一年にも感じられた。  
(黒い雨)

- 陽はすでに落日といった感じで、遙か遠くの無数の煙突のために、赤黒く汚れており、それが魚津には何か不吉なものに感じられた。 (氷壁)
- 明子との生活の困難を話して、新しい暮し方の希望を、その女に結びつけて申出でたとき、女がそれを承諾したということは、広介に自信を与えると同時に、また、まるで夢のような現実の展開にも感じられていた。広介はほっと溜息を吐いた。 (くれない)
- 「そう、あれは、昭和九年か、十年だったでしょう。お母さまは、おどろいたものよ。朝鮮民族の反逆や憤怒が、無言の踊りに感じられてね。どちらのような、あがくような、荒けずりで、激しい踊りでね。」 (舞姫)

〈不自然なものに・危険なものに・狂暴なものに・気まずいものに・変ったものに・深いものに・華やかなものに・無価値なものに・空虚なものに・無気味なものに・聞き馴れないものに・身近なものに・異様なものに・みじめなものに・味気ないものに・新鮮なものに・重苦しく長いものに・大きいものに・よそよそしいものに・長いものに・素晴らしいことに・息苦しさに・不幸な女に・一時間にも 感じられる〉

このために、〈思われる〉の場合と同じように、〈～に〉のかたちでさしだされているものが、特性をあらわす抽象名詞なのか、形容詞そのものなのか区別がつかない場合もある。

- 美那子が小坂乙彦を避けていたことは知っている。しかし、その避け方が不自然に感じられていた。何かない限り、あのようにむきになって小坂を避ける必要はないと思われた。 (氷壁)
- 代助にはその調子よりもその返事の内容が不合理に感ぜられた。 (それから)

- 初めての女性名前の颶風が本土に上がった日だった。颶風に名前がつけられていることが、人々には耳新しく奇異に感じられていた。

(あすなろ物語)

- こうして兄と一所に昇降器に乗ったり、権現へ行ったりするのが、その日は自分にとって、何だか不安に感ぜられた。 (行人)

〈新鮮に・不思議に・窮屈に・気の毒に・異常に・残酷に・あわれに・切実に・純粹に・異様に・みだらに・不愉快に　　感じられる〉

### ③ 〈 ~の ように・ ~の ごとく・ ~らしく 〉

〈 ~の ように　思われる (考えられる・感じられる) 〉 の場合、たとえや比喩のかたちで表現しながら、推察的な見解としてのべている。そのたとえ方は、動詞の場合も形容詞の場合も名詞の場合もあるが、これらはモーダルな表現のひとつのタイプにだいぶ移行しているといえるだろう。

- 見栄も外聞もなく、一番帰りたがっていた九右衛門が永久にここに眠つていなければならぬと思うと、胸にこみ上げて来るものがあった。顔を上げた時、光太夫にはふと墓石が動いたように思われた。

(おろしあ国酔夢譚)

- 島村は見入っているうちに、鏡のあることをだんだん忘れてしまって、夕景色の流れのなかに娘が浮んでいるように思われて來た。 (雪国)

- 佐山は毎日毎日、その電話のかかってくるのを宿でいらいらして待っていたそうですから、彼女の到着の日はきまつてなかったように思われます。

(点と線)

- 何故早くこういう場所へ引越しして来なかつたろう、と青木は後悔した位であった。それ程この漁村の生活が彼の多病な身に適するように思われた。  
(春)
- 「ほんとに熱がありますの？風邪かしら」そう言いながら、美那子は夫の額に手を伸ばして來た。教之助は額に触れた美那子の手がひどく冷たいように思われた。  
(氷壁)
- 然しそういう髪を切っているかいないかという心づかいは、女工さんたちとの関係にとってもたいしたことではないようにこの頃思われてきた。  
(くれない)
- 見ると、鼻がすこし尖(とが)つたというだけで、愁いの残った青木の死顔は生きている時とそう変りがないように思われる。  
(春)
- そして、浦島は、やがて飽きた。許される事に飽きたのかも知れない。陸上の貧しい生活が恋しくなった。お互い他人の批評を気にして、泣いたり怒ったりケチにこそこそ暮している陸上の人たちが、たまらなく可憐で、そして、何だか美しいもののようにさえ思われて來た。  
(お伽草紙)
- ある朝、雨があがると、一点の雲もない青空が低い山の上に展(ひろ)がつていたが、長雨に悩まされ通したものの眼には、その青空はまるで虚偽のように思われた。  
(原民喜集)
- いくつかの民謡がくり返し、くり返し、歌われました。歌っている人たちにとっては、それは、かなり長い時間のように思われました。  
(山本有三集)

〈～のように 考えられる・感じられる〉 のばあいも、おなじようなつかい方をしながら、推察的な意味あいをこめた見解を表現することができる。〈考えられる〉の方がいくらか「可能」の意味あいが強かつたり、〈感じられる〉の方が「感性的なうけとめ方」の意味あいが強かつたりする。いずれもモーダルな表現の意味あいを感じさせる面をもっていながらも、〈考えられる〉と〈感じられる〉の方は、その語彙的な意味の要素もまだたもたれていて、〈思われる〉の文ほどにタイプとしてのモーダルな表現に移行してしまっているとは言い切れないのかもしれない。

- 現実の世界では、生きた人間同士で、お互いを理解するという事は、どんなに激しい恋愛の火中にあっても、むずかしいのであろう。微妙な虹が、人間の心の奥底には現われては消え、現われては消えてゆくものなのだろう。そこをもどかしがって、人間は笑つたり泣いたりしているだけのようにも考えられた。人間はそうした生きものなのであろう。ゆき子は富岡に逢いたかった。(浮雲)
- ある限界までは、我儘(わがまま)の通せる良人であるだけに、三千代は、自分の今度の上京が、軽はずみであったようにも、考えられた。 (めし)
- 何か収穫があるような錯覚で、日々を生きているだけの自分が、するい人間のようにも考えられて来る。 (浮雲)
- 橙黄色(とうおうしょく) の日輪が、真向うの水と空と接した処から出た。水平線を基 線にして見ているので、日はすんすん升(のぼ)って行くように感ぜられる。 (森鷗外)
- 道は左右に田を控えているらしく思われた。そして道と田の境目には小河の流れが時々聞こえるように感ぜられた。田は両方とも狭く細く山で仕切られているような気もした。 (明暗)

- 父や母や兄弟の住む、古い歴史を有った家を出た。出る時は殆んど何事をも感じなかった。母とお重が別れを惜むように浮かない顔をするのが、却って厭であった。彼等は自分の自由行動をわざと妨げる様に感ぜられた。 嫂だけは淋(さみ)しいながら笑ってくれた。  
(行人)
- 落ち着いた、はっきりした声である。そしてなんとなく金石(きんせき)の響を帯びているように感ぜられた。  
(青年)
- 一夜を過して、住み馴れた家に帰るのは、旅行から帰って来たような気持であった。この家を出てからもう一ヶ月も過ぎたように感じられた。省子や女中の顔が面映ゆく、帰り辛い気もした。  
(幸福の限界)
- 嫂はそれ程驚いた様子もなかった。けれども気の所為(せい)か、常から蒼い顔が一層蒼いように感ぜられた。  
(行人)
- 二町ばかりはなれた道を通るらしい車の輪の音が、カラカラときこえてきた。それが、はじめて聞いたこの世の物音のように感じられた。その音は、もう夕方になったことを久助君に知らせた。  
(新美南吉)
- 山々の色は黒いにかかわらず、どうしたはずみかそれがさまざまと白雪の色に見えた。そうすると山々が透明で寂しいものであるかのように感じられて來た。空と山とは調和などしていない。  
(雪国)
- (汽車の) 窓の鏡に写る娘の輪郭のまわりを絶えず夕景色が動いているので、娘の顔も透明のように感じられた。しかしほんとうに透明かどうかは、顔の裏を流れてやまぬ夕景色が顔の表を通してかのように錯覚されて、見極める時がつかめないのだった。  
(雪国)

あまり用例としては多くないが、〈～らしく・～のごとく〉なども、このような意味をもってつかわれる。

- 帰りに下女部屋をのぞいてみると、飯たきが出入りの車夫と火鉢をはさんでひそひそ何か話していた。千代子にはそれが宵子の不幸を細かに語っているらしく思われた。  
(彼岸過迄)
- 兄に同情の多い母から見ると、嫂の後姿は、如何にも冷淡らしく思われたのだろう。が、自分はそれに対して何とも答えなかつた。  
(行人)
- 二、三人の仲間と、どこか海沿いの田舎へ魚釣りに出掛けているらしく、宿には、半月ほど留守にすると言い置いてあつた。こうしたことでも新蔵らしく思われた。どこへ行ってもすぐ土地の人と親しくなり、結構その生活の中に馴染んで行くところは、小市も庄蔵も磯吉も真似て及ばない点であつた。  
(おろしあ国酔夢譚)
- 外面(そと)を狂い廻る暴風雨(あらし)が、木を根こそぎにしたり、塀を倒したり、屋根瓦を櫓(めぐ)つたりするのみならず、今薄暗い行燈(あんどん)の下(もと)で味のない煙草を吸つているこの自分を、粉微塵(こみじん)に破壊する予告の如く思われた。  
(行人)

#### ④ 〈～して 考えられる (感じられる)〉 (動詞のなかごめ)

これもあり用例としては多くないが、副詞化して様態をあらわす動詞のかごめのかたちの場合にも、物事に対する見解や態度を表現している。

- 始終心の隅に、今別れて来た広介のことを追つていた。すると、一度も來たことのない明るい床屋の椅子に髪を切つている自分が、想像の中の広介たちに対比されて、ひとりうらぶれて考えられた。  
(くれない)

- こんなところにまで駆け落ち同様に追い込まれて来た自分達の考えが、  
狂人じみて考えられて来る。 (浮雲)
- 風の真だ蒸し暑い真夏の夜の病棟は消毒液の鼻をさす匂いさえどんより濁つて感じられた。 (女坂)
- 学校では教わらなかつたが、学校の先生になられてみると、洪作にはさき子が今までのさき子と違つたものに見えた。何となくさき子の眼は、今までの彼女のそれとは違つて感じられた。 (しろばんば)  
⑤ < ~く (~しく) 思われる (考えられる・感じられる) >  
(形容詞・副詞)

〈い〉 でおわる形容詞のなかどめのかたちも、副詞化しながら、見解や評価的な態度をその内容としてさしだす。この種の文も、知覚によって確認されたものに対する思考的な・感性的なうけとめ方を表現するというかたちをとりながらも、物事に対する感情的な判断や見解、評価的な態度をあらわす、モーダルなタイプの文のひとつに移行していると言つてもいいのかもしねない。

- 自分の母親が髪を結ってくれたり、花簪を買ってくれたり甘すぎるほどだったのを知っているだけに、まだ小さい悦子が両親揃つていながら、そのどちらにも思う存分甘えられず子供ながら気を張っているのが須賀にはある時はいとしく思われる。 (女坂)
- 泉太は弟のように無理にも自分の言い出したことを遠そうとする方ではなかった。それだけ気の弱い性質が、岸本にはいじらしく思われた。 (新生)

- 追想は更に岸本を遠い少年の時代に連れていった。無邪気な薪屋の子息(むすこ)や頬(ほっぺた)の紅い時計屋の娘なぞと一緒に遊んだ時代のことを考えると、今更のようにその昔が可懐(なつか)しく、恋しく、楽しく思われた。  
(春)
- 行灯(あんどん)の細い灯心の光に、隣の床にぐっすり寝入っている悦子のやわらかくふくらんだ片寝の頬が、ほんのり白く浮んでいる。この子は起きている時は、割に大人びているだけに、寝顔のあどけなさが倫には可愛く思われるのだった。  
(女坂)
- 姉と前のように話をすることの出来ぬ厨子王は、紡いでいる姉に、小萩がいて物を言ってくれるのが、何より心強く思われる。  
(森鷗外)
- いまごろは、富岡はあの家へ戻って、細君に、一夜の外泊をどんな風に云いわけしているのかとおかしかった。富岡の事だから、何気なくふるまつているに違いない。家族のものは、富岡に対して、不安を持たないだろう。ゆき子はそうした事が妬(ねた)ましく考えられた。  
(浮雲)  

（明るく・珍しく・おそらく・おぼつかなく・頼りなく・うらやましく・面白く・小さく・遅く・味気なく・いぶかしく・頼もしく・痛々しく・なごり深く・気味悪く・名残惜しく・手ぬるく・落ち着かなく・うつとうしく・恨めしく・奥ゆかしく・なつかしく・憎く・冷たく・惜しく・ふさわしく・そっけなく・よく・わるく  
……思われる）
- あき子は洪作の傍から離れないで、「中学校へはいったら手紙を下さいね、わたしは、多分東京の女学校へ行くようになると思うわ」そんなことを言った。洪作はそんなあき子がひどくまぶしく感じられた。  
(しろばんば)

- このランプのために、大野の町せんたいが、竜宮城かなにかのように明るく感じられた。  
(新美南吉)
- 美那はここまで言って、なお話し足りないものを感じた。自分の気持が相手に充分伝わらないことがもどかしく感じられた。  
(氷壁)
- 人間と云うものの哀しさが、浮雲のようにたよりなく感じられた。まるきり生きてゆく自信がなかったのだ。二人は、何処へ行く当てもなく、市電の停留所までぶらぶら歩いた。  
(浮雲)
- それを読むと、いつもやさしくしてくれた植松化粧品店の奥さんやお姉さんが急に遠く、よそよそしく感じられた。  
(高円寺純情商店街)
- みんな、それぞれ一つずつ進級したことが心をはずませ、足もとも軽かつたのだ。かばんの中は新しい教科書にかわっているし、今日から新しい教室で、新しい先生に教えてもらうたのしみは、いつも通る道までが新しく感じられた。  
(二十四の瞳)

〈面白く・遠く・頼もしく・広く・もの足りなく・冷たく・痛く・危うく・頼りなく・うつとうしく・薄暗く・いとわしく・重たく・凄まじく・寂しく・つまらなく・憎く・腹立たしく・目新しく・重苦しく・大きく・意地悪く・馬鹿らしく・長く・のろく・おかしく・美しく・うらめしく・怖く・珍しく・小さく・強く  
…… 感じられる 〉

## 【5】おわりに 一 自発表現の文について 一

いわゆる「自発」というのは、ごくかんたんに一般的にいえば、「人間の内部にひとりでにおこってくる感情や思考のながれ」ということになるだろうが、これが動詞の《s a r e r u》という、ある特定の文法的なかたちに固定化し、

定着している固有の文法的な意味としての独立性をもっているものなのか、それとも、おなじく《s a r e r u》という文法的ななかたちのなかに「うけみ」という文法的な意味を固定化させている「ヴォイス（態・v o i c e）」のカテゴリーや「可能」のカテゴリーに属する動詞の文法的な形式が、一定の文法的な構造のなかに使用されたときにうまれてくる、ある種の文法的な意味あいやバリエーションにすぎないのかという問題になれば、それほど簡単にきめつけられるものではない。歴史的にみても、われわれ日本語においては、この文法的ななかたちのなかに「自発性」という文法的な意味あいを受けとめ続けてきているし、現代日本語においても、今なおこの文法的ななかたちのなかに「うけみ」や「可能」とはことなる文法的な意味をうけとめ、つかいわけていることも使用の事実である。おなじ文法的ななかたちがそれぞれ別々の文法的な意味を実現し、文法的な多義性をおびているとすれば、対立する文法的ななかたち《s u r u》とともにいかなる文法的なカテゴリーを形成しているかということを考えないわけにはいかないだろう。「ヴォイス」のカテゴリーが【客体にはたらきかける動作をめぐっての能動性と受動性】を問題にし、「可能」のカテゴリーが【動作の実現をめぐっての可能性と現実性（ポテンシャルとアクチュアル）】を問題にしているとすれば、「自発性」のカテゴリーにおいては、【思考活動や心理活動における人間主体の意志性と非意志性（非積極性）】を問題にしている。おなじ《s a r e r u》という文法的ななかたちが、それぞれに《s u r u》のかたちと対立しながら、独自の文法的な意味をひきうけていることになる。われわれの日常の言語活動のなかで、それらをまちがいなしに使いわけているという事実は、たとえ経験的にではあっても、そこに明確な語彙的な意味の条件や文法的な構造における使用の条件をかぎわけているということになる。今回この報告のなかであつかった「自発」の文法的な意味についていえば、これらの3つのうちでは動詞の覆っている領域がもっともせまく、【人間の思考活動や心理活動、感情をあらわす動詞】に限られる。そして、文の構造においても、【その活動の主体はつねに具体的な人間（基本的には1人称の人間）】である。こういった限られた語彙的な意味のグループに属する動詞にのみあてはまる、特定のカテゴリカルな意味をもつ動詞の場合にのみあてはま

る文法的な意味であっても、今の段階では、さしあたって、「自発」も《s a r e r u》というかたちのもつ文法的な意味としてうけとめておくことになるのだろう。

こうして、これまでの用例からいえば、「自発」の文法的な意味を表現しているのは、「思考や判断や感情」を表現する文に限定されるということになる。〈ながめられる・みわたされる・のぞまれる〉のような「知覚（視覚）による確認」の文は、一見したところ似ているようにも見えるが、「自発」の表現の領域に入れることはできないだろう。また、文の人称性の面でも、一般化された人間ではなく、特定の人間（とりわけ、会話文であれば、「はなし手・1人称の人間」）にかぎられている。文学作品などの地の文であれば、かたり手がその人物たちばに立って、主体である人間としてその思考や感情のながれをのべることになる。人称が一般化された場合、それは「自発」の表現ではなく、「可能」の表現となるか、あるいは、「対象のもつ特性」の表現となるだろう。

この報告では、ひとまず「自発表現の文」とよばれそうな文とそれらの周辺をなしている文について、いくらくらいタイプにわけて順に記述しながら検討してみたのだが、「自発性」を独自の文法的なカテゴリーとして位置づけ、《s a r e r u》のかたちに「自発」という文法的な意味をとらえるとするならば、ここにはいりこむ動詞は、(2) と (3) のグループの動詞に限定されることになるだろう。

(1) 知覚による確認を表現する文

- ・「ながめられる・みわたされる・のぞまれる」を述語にする文

(2) 判断を表現する文

- ・「うかがわれる・うなづかれる・納得される」を述語にする文  
(思考や推察による確認にもとづいた判断・発見的な判断)

(3) 感情や思考を表現する文

- ・「はばかられる・ためらわれる・おどろかれる」を述語にする文  
(人間の内部におこってくる心のうごき)
- ・「しのばれる・思い描かれる・思い出される」を述語にする文  
(思い・思考のうごき)
- ・「つぶやかれる」を述語にする文  
(言語活動として)

(4) モーダルな述語のタイプへの移行

- ①「～と 思われる (考えられる・感じられる)」
- ②「～に 思われる (考えられる・感じられる)」
- ③「～のように・～らしく・～のごとく」
- ④「～して (動詞のなかどめのかたち)」
- ⑤「～く ～しく (形容詞からの転成副詞)」